

街道の歴史

江戸時代から明治前半まで、江戸・東京の人が成田参詣に出かける場合に最も速く楽なのが、日本橋小網町から出ていた行徳船（長渡船）で小名木川・新川を通り、行徳で下船して陸路に行くコースであった。江戸庶民にとって成田山参詣は三泊四日の小旅行であった。

佐倉（成田）街道

江戸幕府の公式文書では「佐倉街道」と呼称されていた。（江戸城と譜代の藩佐倉藩を結ぶ街道）江戸を出発して最初の宿・千住宿を起点に、「さくらみち」「なりたみち」と呼ばれた旧街道を、成田山新勝寺まで14里余・約58キロの道程江戸と佐倉藩城下をむすぶ道を佐倉道と呼んだ。佐倉の北東12kmあまりのところに成田山新勝寺がある。

江戸時代後期に成田詣が盛んになるにつれて佐倉道は成田道（街道）と呼ばれるようになった。今「成田街道」といえば船橋を起点とする国道296号線をいう。

江戸庶民の成田山参詣ルート

① 日本橋小網町（行徳船に乗り）→小名木川、新川（掘割水路を利用）→本行徳へ上陸
行徳街道を北上して八幡→船橋→大和田→臼井→酒々井→寺台→（296号）成田街道ルート

最も速く楽な人気のルート

② 日本橋小網町（行徳船に乗り）→小名木川、新川（掘割水路を利用）→本行徳へ上陸、
行徳街道を北上して八幡から木下街道で利根川にでて安食まで川を下る方法
木下河岸（きおろしかし）→安食河岸

徒歩で大竹→松崎（まんざき）→山口を通り新勝寺

芭蕉が鹿島紀行で通ったルートである

芭蕉庵～六軒堀～小名木川経由～行徳→千葉県市川市八幡→千葉県鎌ヶ谷市→我孫子市布佐
～利根川船～鹿島上陸

③ 一般庶民の徒歩ルート

日本橋→千住→水戸街道の**新宿（にいじゅく）**でわかる道である→小岩で江戸川を渡って→
市川の渡し→八幡→船橋→大和田→臼井→酒々井→寺台→（296号）成田街道ルート

佐倉藩主が参勤交代につかった公式ルート

日本橋小網町（こあみちょう）→隅田川→小名木川→旧中川→荒川→新川→旧江戸川→江戸川→本行徳

小名木川（おなぎがわ）は、東京都江東区を流れる**人工河川**である。1590年頃、江戸城を居城に定めた徳川家康は、兵糧としての**塩の確保**の為**行徳塩田**（現在の千葉県行徳）に目を付けた。しかし江戸湊（当時は日比谷入江付近）までの東京湾北部は砂州や浅瀬で船がしばしば座礁するため、大きく沖合を迂回するしかなかった。そこで**小名木四郎兵衛に命じて、行徳までの運河**を開削させたのが始まりである。運河の開削によって経路が大幅に短縮された。塩以外の運搬や、成田参詣客なども運ぶようになって物量が増大した。

1629年小名木川は江戸物流の重要河川と認識され、利根川東遷事業と併せて拡幅、小名木川と旧中川、新川の合流地点には「中川船番所」が置かれた。新川、江戸川、利根川を経由する航路が整備されると近郊の農村で採れた野菜・東北地方の年貢米などが行き交う大航路となった。

隅田川と中川とを結んだ運河で、徳川家康江戸入府後まもなく開通した。後に深川方面の埋立が進んで川岸が改修され、現在の小名木川（**延長4.6km**）になった。中川から先は東の舟堀川に結ばれて江戸川と隅田川が通じ、東廻りの船が利根川、江戸川を経て江戸へ物資を運ぶ大動脈であった。

行徳船（ぎょうとくぶね）とは江戸から大正にかけて江戸と下総国行徳を結んだ船のこと。江戸小網町の行徳河岸から本行徳の船場を往復するところから「行徳船」と名づけられた。これらの船は行徳船のほか長渡船、番船などとも呼ばれた。 **24人乗り船頭一人**

行徳船の航路は当初、行徳塩田でつくられた塩を江戸へ運ぶために1632年（寛永9年）頃からはじめられたが、やがて小名木川 新川の航路も人や物資の回送に使われるようになった。

就航する船は最初16隻ほどだったが、1671年（寛文元年）に53隻1848年から1853年（嘉永年間）には**62隻**に増加し、**毎日午前6時から午後6時まで江戸と行徳の間を往来した**。ふつう船頭ひとりが漕ぎ手となり、24人乗りの客船で、**旅客や野菜や魚介類のほか日用品などの輸送**を行った。行徳迄は5時間前後の船旅であったと思われる。

宿場

市川宿（市川市） 八幡宿（市川市） 船橋宿（船橋市） 大和田宿（八千代市）
白井宿（佐倉市） 酒々井宿（酒々井町） 寺台宿（成田市）

隅田川から荒川まで（日本橋小網町から市川行徳まで）



旧中川 新川 旧江戸川 江戸川 荒川

松尾芭蕉の鹿島詣

1687年8月14日、芭蕉は曾良と禅僧の宗波を引き連れ、鹿島神宮参詣と筑波山の月見の旅に出た。この旅が『鹿島詣』である。月見の為だけではなく、実は芭蕉参禅の師佛頂が鹿島の臨済宗瑞甕山根本寺の住職であり、佛頂を訪ねるのももう一つの目的であった。芭蕉一行は、深川芭蕉庵の門前から舟で小名木川、新川を東進し、江戸川に入ってこれをさかのぼり、行徳で舟を上がった。この旅の行程は、芭蕉庵～六軒堀～小名木川経由～行徳→千葉県市川市八幡→千葉県鎌ヶ谷市→我孫子市布佐～利根川船～鹿島上陸というものだった。

江戸時代の旅人

江戸時代の旅人は1日で何キロくらい歩いたのか？

一般的に江戸を立って京に向かう場合、最初の宿泊地となったのが戸塚宿、あるいはその手前の保土ヶ谷宿でした。日本橋から保土ヶ谷宿までが八里九町(約33km)、戸塚宿迄は十里半(約42km)です。だから1日の行程はおよそ八里から十里強(約32～40km)といえそうです。もちろんこれは成人男子の場合ですが、歩行速度を時速4kmとすると、単純計算で約8～10時間も歩くことになります。その為には夜明け前に出発し、夕方日が暮れないうちに次の宿に着くようにしていたようです。

日本橋から京まで、何日くらいかかったのでしょうか？

一般的には、徒歩で13日から15日前後かかっていたようです。江戸日本橋から京都三条大橋までの距離は約492km。15日とすると、1日平均約33kmも歩く計算になります。